
8月の秘密基地

Nana.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

8月の秘密基地

【著者名】

Nana .

【ノード】

N1580E

【あらすじ】

主人公の紗江は、彼氏の淳平から来る毎日のメールに嫌気が差していた。ある日ふいに立ち寄った空き地で、ある少年と出会つて…?

友達の夕実は、携帯を枕元に置いたとかないと寝れないって言つてた。
お隣の小学五年生のツトム君は、最近首から携帯を下げている。
最近じや、お母さんまでデコメールとかやり出した。

着うた一曲、100円。

月の携帯使用料金、10000円超えナリ。

私達若者に、携帯つていう便利なモノが普及する事を、よく思つて
ないお偉いさん達がいるとか、いないとか。

「おい、紗江。何でお前、昨日メール返さなかつたんだよ

夏休みの補習授業。

だらだらと一時間半。

時計が毎の十一時を回り、やつと終わつたと思つたら、淳平が口を
尖らせて私に携帯の画面を突きつけた。

「嘘、送つた?じゃあ、センターで止まつてたんだ」「マジで?」

私は軽く嘘をついて淳平に笑いかける。

角の削れた革鞄に、使つてなくて新品同様の教科書をしまつた。

私は、携帯に踊らされている。何か、阿保っぽい。

メールでなら、人の心の中に踏み込んでいいのだろうか。

淳平なんかもう、サッカーやつた後の泥だらけの靴で、私の中に入りこもうとする。

これは列記とした不法侵入。

毎日の低俗なメールのやり取りに、私の親指は億劫になつていて。ポケットで携帯が振動する度、何ともいえない気持ちになる。でも友達に聞いたら、『それがフツウ』だと言つ。

「紗江わあ、最近付き合って悪くない?」

私はぎくつとした。

「そんな事ないよ

「何か……冷めてるし」

「それは元からの性格じゃない?」

「ふーん」

淳平は最近、スネ夫くんだ。

拗ねて口を尖らせるから、ますますそれらしい。

その原因は、私が淳平との“付き合いつ”つていう価値観の差に戸惑つていて、それがそれとなく態度に表れてしまつていいせいだと思う。

本当に好きなら、毎日のしつこいくらいのメールも鬱陶しいだなんて思わないのだろうか。

心の中に踏み込まれても、嫌だなんて思わないのだろうか。

だけど私の場合、もし淳平じゃなくても、同じ様にモヤモヤしてい

たと思つ。

淳平と付き合いだしたのは、昨年の五月の頭。体育祭の練習の帰りに告白された。

だらだらと五月病にかかりかけ、どこか心寂しかった私は、浮かれて首を縦に振つた。

淳平は賑やかで明るいから、クラスでもかなり目立つ存在で、男女ともに人気がある。だから私は、何で淳平が私を選んだのか、今だに分からぬでいる。

淳平は何気に束縛体质で、言動も考え方も、どこか子供っぽい。

子供っぽい…といえば、淳平に限らず皆そうだ。高校生と言えど、皆まだまだ子供なのだ。

逆に大人になる事に逆らつて子供帰りし、昔のアニメがクラスで流行つたりしているくらいなのだから。つまりまあ、自我に目覚めるのに忙しい、恋だ、青春だ、将来だつて難しい、複雑なオトシゴロなのだ。

「暑い……」

ぶつ、ぶつ倒れそう。

もう七月も終わる。

太陽がじりじりと照らし、私の頭皮は火傷しそうなほど熱い。蝉は頼んでもいらないのに大合唱を披露し、目の前にはゅらゅらと水が逃

げていく。

最近じゃ テレビで温暖化、温暖化って騒がれてるけど、こりゃつて実際に異常な暑さを嫌でも体験させられれば、長つたらしい文章で説明されなくとも『何か、地球が危ない気がする』と本能で感じるというもの。

今日はサッカー部の練習があつてよかったです。

今日は誰とも喋りたくない。

気がつかぬ間に、蚊に二の腕を刺されたらしい。

〇型の血は美味しいというのは、本当なんだろうか。あんな小さな虫けらにも、味へのこだわりがあるなんて、何だか生意氣だ。

二の腕を搔き毬りながら、私はめげずに歩き続け、木々が鬱蒼と茂つて森のようになつていい所まで来た。すぐ傍に、未だに何をしているのか分からぬ、中くらいの大きさの工場があり、乾いた音を響かせている。煙突からは、明らかに街の空気を汚していくような灰色の煙が、もくもくと空へ伸びている。

工場の外には瓦礫の山。

タイヤや廃棄された車の部品などが散乱していて、ちょっと映画のセットみたいだ。

そして、そのすぐ隣に草ぼうぼうの空き地がある。

伸びきつた雑草は多分、私の身長くらいにあるかもしない。針金で囲つてはあるものの、誰も手をつけていなそうな空き地だ。誰の所有地なのだろうか。

空き地を眺めていると、ふと胸に疼く物があった。

記憶の扉がノックされる。

私は思わず足を止めた。

「そうだ、何だっけ、名前
思わず頭を抱え込む。

「…チビ？あ、チビだ！」

それをキッカケに、幼い頃の記憶がビュンビュンと音を立てるようにして蘇ってきた。

あれは、小学生の頃。

いつものように外で遊んでいた私は、ある一匹の子犬を見つけた。泥で汚れていたけど、瞳は澄んで、綺麗な茶色の毛並みをしていた。野良犬だった。

私はその犬に、チビといつ名前をつけた。

『お母さん、お家で犬を飼つてもいい？』 そんな子供のけな氣なお願いにも関わらず、親は揃つて、首を横に振った。途方に暮れた私は、思いついた。

外にチビのお家を作つてあげよう！そして、毎日餌を持って来よう！

いかにも子供らしい発想。

しかし、あの頃の私には、最高のアイディアであったのだ。

その場所に選ばれたのが、この空き地。

ちょうど真ん中に草が少ないスポットがあり、大きなケヤキの木が一本聳え立つっていた。

その木の下に、ダンボールで作ったみすぼらしい質素な小屋。しかし、運よく雨が降つても、風が吹いても、小屋は壊れなかつたので、私は夏休み、毎日のように通いつめた。

いつしかそこが、私の秘密基地となつていた。

その言葉の響きに、幼い私は一丁前に酔いしれていたのだ。いけない事をしていたわけじゃないのに、どこかハラハラするような、不思議な感覚。そこには誰にも踏み込めない、私だけの世界が存在していた。

あの頃の私は、宿題よりも、習い事よりも、友達と遊ぶよりも、チビと遊ぶ時間が楽しかつた。大切だつた。

チビには、少ないお小遣いでドッグフードやミルクを買ってあげた。チビが小屋の中におとなしく居た時もあれば、いない時もあつた。三日現れずに、諦めてかけていると、ふりつとまた姿を現したりした。

ついに、七月の終わり頃、チビは本当にいなくなつてしまつた。一週間待つても、二週間待つても、チビの鳴き声は聞こえない。

それでも私はめげずに通い続けた。

このままじゃ、一生会えない。一度と会えない。

私は毎日寂しくて押しつぶされそつた。

もう一度会いたい。

もう一度、頭を撫でてあげたい。声が聞きたい。

まだ別れの辛さを味わった事のない子供には、とても酷な時間だった。

しかし期待も虚しく、とうとうチビが戻つてくる事はなかつた。私がいつからその場所へ行かなくなつたのかは、あんまりよく覚えてない。

「わあ…懐かしい」

私はそんな事を思い出して、胸が絞られるような切ない気持ちと、あの頃と同じような好奇心で、ふりふりと空き地に足を踏み入れた。

「ほつ」

ミニスカートで針金をまたぐ。

はしたないが、どうせ誰も見てはおらん。

草を搔き分けるのはなかなか大変だつた。すべすべ足に当たり、かゆくてたまらない。しかも、小さな虫達がぴょんぴょんと鬱陶しく目の前を飛び回つてゐる。

くつそー。

私は時々奇声を発しながらも、何とかして中心のスポットに向かつてずんずん進んでいった。

ついに中心に到着。
何か達成感。

ただいま。そんな言葉を言いたくなつた。

草の匂い、ヒメジオンの花が雑草に紛れて、沢山咲き乱れていた。

ヒメジオン。別名、貧乏草。

誰が言い出したのか、ヘンテコなあだ名をつけられて、何とも氣の毒な花だ。

最後の長い草を搔き分けると、何か茶色いものが見えた。

茶色の毛。

茶色？ 気がつくと声を発していた。

「チビー。」

私はまさかと思いながら、慌てて中に足を踏み入れた。するとそこに居たのは、チビ……

ではなく、茶色い髪の少年だった。地べたに寝そべり目を閉じている。

何だ、と思ったのと同時に、何でここに人がいるんだろうと思つた。私がしばらく状況を読めずに、少年に目を取られていると、彼の目がパツと開き、首だけが私の方を向いた。思わずたじろいだ。彼は棘棘と言つた。

「人の秘密基地に勝手に入つてこないでくれる？」

「え？」

秘密基地……人の秘密基地？

その言葉を聞いて私は思わず言い返していた。

「ルルは私の秘密基地だよ」と。

案の定、少年は不思議そうな顔をして、体を起こした。体の足元からぐんぐん後悔が湧き上がって来る。何を言つたんだろう私は。混乱と恥ずかしさで、ひたすら焦つた。

「あ、えつと」

ここはただの思い出の切り抜き。
あの頃と変わらない匂いがする場所。
別に誰のものとか、そういうんじゃないの?」
すると彼は急に笑い出した。

「驚いた。先客がいたなんて、思いもしなかった」

それは私の台詞だ。

「しかも、"チビ"って何?僕がチビだから、何かの当て付けかと思つた」

愛らしく笑う彼の全身を、落ち着いて見渡す私。
確かにこの子は割りと小柄だ。きっと、私より少し大きいくらい。
165センチくらいかな。

端正な顔立ち。童顔だからか、幼く見える。一体歳はいくつだろうか?

「チビは、人間じゃないよ」

私はそれだけ言って、じりっと足を動かした。
彼は「ふーん」と頷き、あぐらをかいた。

「じゃあ、何だろうな。宇宙人？」

「は？」

「何かここ、UFOとか降りてきそうじゃない？こここの雑草も上から見たら、ミステリーサークルみたいに見えたりして」

「何それ」

私は思わず笑つた。

これが奏太との出逢いだった。

毎日補習が終わると、秘密基地へ顔を出す。するとそこにはいつも奏太がいる。そして、他愛もない話をしたり、昼寝をしたり。

私はどんどん奏太に惹かれていった。

恋とも友情とも違う、不思議な気持ち。

「ねえ、奏太、メールアドレス教えてよ」

いつものように秘密基地で寝そべる奏太に、私は携帯を突きつけて言つた。

私は奏太の名前しか知らない。苗字も、住所も、年齢も。繋がりを求めて、私は嫌いなはずの携帯電話にすがつてしまつてい

る。

奏太はあっけらかんと返した。

「僕、携帯、持っていないんだ」「え？」

私は間の抜けた声を出した。

携帯を持っていることを前提で話をしていた私は、完全に的がはずれて、こじこじと携帯を持つ手をおろした。

「不便じゃない？携帯ないと」「そんな事ないよ」

奏太があくびをする。

私は「ふうん」と小さく頷いて、手元の携帯に手をやつた。

「じゃあ逆に聞いていい？不便じゃない？携帯があると」

奏太はそう言ってふつと笑った。

私は後ろ頭を突かれたような心持がした。

手元の携帯電話が、ずんと重くなつた。

しばらく黙り込んだ。

その間にも、私の携帯は緑色のイルミネーションを発し、ぶるぶると振動を続ける。

気持ち悪いと思つた。

携帯がものすごく醜い物のような気がして、思わず手を放した。

「ねえ紗江。エスパーとか信じる？」

「え？」

「テレパシーってさあ、人間の思い込みで成立すると思つんだよね」「何？急に」

「例えば、僕が心の中で紗江に、秘密基地で会おうって呟くとする。それで僕が秘密基地に行つて、そこに紗江がいたら、それはもう気持ちが通じた、テレパシーが通じたって事になるんじゃないかなって事」

「以心伝心みたいな？」

「そう。だから、人間は思い込みでいくらでも人と繋がることが出来るんだよ」

奏太の澄んだ瞳に、私の戸惑い顔が映る。

「だから携帯なんかなくても、僕らは繋がっていられる

その言葉が、柔らかな風となつて、私の心を包み込んだ。微笑んだ奏太につられて、私も口を緩ませた。

奏太の髪が揺れる。

心のずっと奥で、チビが鳴いたような気がした。

「はい、じゃあ今日はここまで。次回は三十一ページの、関係副詞から入ります」

やっと補習が終わり、私は早々と教科書をしまい込み、立ち上がりた。

早く奏太に会いたい。話がしたい。

奏太の事を考えていると、心が穏やかになる。穏やかな海。

だけどそこへ、「機嫌斜めの荒波が、私の行く手を阻んだ。

「淳平」

「紗江、ちょっと」

淳平、怒ってる。

私は乱暴に手を引かれ、隣の視聴覚室に連れて行かれた。

「痛いってば」

「お前、最近毎日どこに行ってるの?」

淳平の厳しい目に、背筋がひやりと冷たくなった。
薄暗い教室の中で、私は平静を装つ。

「別に、どこにも行つてない」

「嘘つけ。俺見たんだよ。お前、誰かと会つてるだろ?」

「…後つけたの?」

「ああ、悪いかよ」

「…最低!」

「最低はどつちだよ!」

淳平はたじろぐ所かさうに勢いづいて、私に突つかかる。

思わずしゃつと皿をつぶる私を見て、頭を投げやりに搔き、淳平は小さく続けた。

「隠れてコソコソ男と会うなんて、ありえねえ」

「奏太はそんなんじやないんだよ！」

淳平は怒りと哀しみが混じつたみたいな皿を私に向けた。

「奏太？」

「淳平、分かつて。淳平と奏太は違うんだよ」「分かんねえよ。変だとは思つてたよ。俺が話しても、笑つて聞いてるだけだし。薄っぺらつつーか…いつも演技してるつつーか…メールも返さねえし。俺らちゃんと付き合つてるのかなって

血の気が引く。

「淳平の言つ、付き合つて……何？」

淳平のひるんだ顔。

奏太と淳平は違う。

淳平の事好きだけど、だけど。

あの秘密基地にだけは、踏み込んで欲しくなかつた。

私と奏太…そしてチビとの特別な場所だから。

涙が溢れ出た。

「メールで好きつて言つて合つてたら、それで繋がつた事になるの？..」

淳平の哀しそうな目が、私を貫いた。私は、その場を逃げ出した。

本当は分かる。

淳平の気持ちは痛いほど分かる。

誰だって一人が怖くて、一人ぼっちになるのが怖くて、誰かと深く繋がろうとする。絶対に裏切らない無償の愛が欲しいんだ。

私だってそうだ。

あの時、奏太に突きつけた携帯。それがすべてだ。

自分の弱さに嫌気が差す。淳平の不器用さに嫌気が差す。

私は走った。あの場所へ。ヒメジオンが揺れる、あの秘密基地へ。

空き地に到着して、私は目を疑った。

ここにパチンコ屋が立つという知らせの看板が、空き地の前に立てられていたのだ。

「…そんな」

私は怖くなつて慌てて中に入った。けやきの木を目指して進む。

パチンコ屋なんていくらでも他に建てればいい。どうしてここなのだろう。

私の居場所を奪わないで。大切な時間を切り取らないで。

「奏太！」

いつもの場所へ着くと、奏太はけやきを見上げていた。

奏太は振り返りざるに話す。

「「」のけやき、僕たちが生まれるずっと前から、「」の町を見守つて
るんだよね」

私は涙ながらにけやきを見上げる。放射状に広がる樹形。力強く根
を張り、高い背で優しく町を見渡しているこの木。

「あの時、紗江が僕を見つけてくれた時、本当に嬉しかった」

奏太の華奢な背中を見つめながら、私は黙つていた。

「一人じやないつて思えた。雨の日も風の日も、ここにくれば君が
いた。この場所を選んでくれて、ありがとう。僕の傍にいてくれて
いた」

奏太は振り返り、私の元へ歩み寄つた。茶色い髪が、ふわふわと揺
れる。

そして、ふわりと両手で私の右手を握つた。

奏太の澄んだ瞳に、泣き虫が映る。

「ずっと待たせていてごめんね。もう一度会えてよかつた。君とた
くさん話ができる、本当に嬉しかった」

「うん」

「紗江は、周りにいる大切な人たちとちゃんと向き合つんだ。そし
て、もっともつと大事にしてあげて。紗江が、その人たちの居場所
になつてあげて」

「うん」

頷く事しか出来ない。

だけど、奏太のメッセージは確かに私の中に根を張った。

「Jの場所が例えなくなってしまっても、ずっと永遠に心の中にあります。」
り続ける。だから忘れないで

「うん」

私達は小さく小指を絡ませた。

大きな機械音が響いた。草を刈っている音だろう。

手を離して、田を閉じた。

心のシャッターをしつかりと押した。

忘れないうちに、失くさないうちに。

チビの鳴き声がしたと思ったら、奏太の姿はもうなかつた。

夏が終わろうとしていた。

「淳平、試合どうだつた？」

「2-1で勝つた！」

夏休みも終わり、新学期が始まった。

私はまだ淳平と付き合っている。
あの視聴覚室でのやりとりから、淳平は変わった。

私の手を優しく引いて、川の堤防まで連れてきたと思つたら、携帯を思い切り川に投げ捨てたのだ。「ナイッシュュー！」なんておどけていた淳平に、私は驚きを隠せなかった。

淳平はしつかりとした口調でこう言った。

「これからは本音で付き合つてこくべ」と。

私は頷いた。

誰よりも不器用なこの人に着いていこうと決めた。

結局また新しい携帯を買った淳平だけど、今までとは違つた意味で、私を大事してくれる。

あの日から、私はあの空き地に行つていない。今頃、パチンコ屋が出来て、ガチャガチャと賑わっているのだろう。あのけやきの木は、きっともうない。

だけど日を閉じれば、いつだって、あの日の永遠に帰れる。

夏の終わり。

ヒメジオンが揺れる、八月の秘密基地に。

(後書き)

最後まで読んでくださった方、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1580e/>

8月の秘密基地

2011年1月18日03時31分発行